

聖地巡礼——ケダルナート



東方研究会専任研究員
清水晶子

ケダルナート寺院は海拔三千五百八十メートルの高地にあり、灰色の切り石を一つ一つ積み重ねて建てられている。ヒンドゥー教の寺院にしては単色で、簡素ながら精巧な彫刻が外部の壁面上部を装飾していて、重厚な風格を見せている。寺院の背後には、万年雪をいただいた六千九百四十メートルのケダルル峰が真近に迫っている。

ヒマラヤの聖地ケダルナートの天気は変わりやすい。ガイドによれば、ケダルルという語には「ぬかるんだ所」という意味があるという。その言葉通り、午後からはずっと霧雨が降り続き、雪山のふところにいることを肌で感じさせるように外気温が一気に下がった。

夕方の礼拝は六時から始まる。ケダルナート寺院のご神体は、シヴァ神の住居とされる



カイラーサ山を形どったような自然の岩である。献火の儀式の後、お寺の扉が開かれ、待ちかねた巡礼者たちは先を争って中へ押し寄せて行く。まるで初詣での光景を見るような熱気に包まれている。ご神体は、うすいピンク色の絹地に銀糸の刺しゅう飾りがほどこされた覆いが掛けられていた。ここでもご神体の写真を撮ることは禁じられていた。

恐らく一生に一度の機会であろう。功德を積むためにはるばる辺地まで困難のともなう山道を登って来た人々は、雨の降る中素足に伝わってくる石の床の冷たさもいとわず、シヴァ神と見える至福の瞬間を迎えているのである。ご神体との対面を心に刻み込むかのように、人々は何度も何度も礼拝の列に並んでいた。

夜になってようやく雨もやみ、星明りをたよりにロτζジまで戻った。夕食もロウソクをともして摂る。聖地には文明の利器はふさわしくな

いと納得し、ロジジで用意してくれた火鉢で部屋を暖めてから床についた。

南インドのバンガロールから来た母子は、翌朝六時のお寺でのプージャー（ご祈禱）を申し込んできたという。五人までは列席が許可されているから一緒にとの招待を受けた。そしてプージャーに参加する前に、必ず沐浴をして身を潔めてくるように指示された。ケダルナート寺院でプージャーをしてもらうことは、特別の功德を積むことになり、そのためには高額の布施を払わなければならないと後で聞いた。

この母子は印刷屋を経営していて、巡礼のために二週間の休暇をとってきたという。五十代半ばのメータ夫人は、元気なうちにかつて両親が巡礼したケダルナートを訪れたかったと話してくれた。ご両親の時代には、私達がリシケイシから二日ばかりで辿りついたバス道路も整備されてなくて、料理道具や使用人と共に、カ

ケダルナート寺院と参道



ゴや馬に揺られて赴いたという。当時は費用の点でも日数の点でも、生活にゆとりがなければ当低聖地巡礼もままならなかったようである。

ロッジで沐浴用のお湯を沸かしてもらうのに手間どって、プージャーの開始に少し遅れた。

早朝の寒い中、入口の床に座ってハーモニウム（手押しオルガン）にあわせて聖歌をうたっている信者たちがいた。お寺の中には、昨夜の絹布がとり払われた。山すそが一メートル余り、高さ七〜八十センチの黒っぽい色のゴツゴツした表面の岩山が安置されていた。これがご神体の姿である。

すでに一同は岩の周囲に座し、一人のバラモン僧によってプージャーがとり行われていた。司祭は花・ギー（バター）・うこんの粉・米を岩に向けてふり注いだり、ガントイ（小さなベル）をならしながら、マントラ（真言）を唱え続けている。最後に、聖歌をうたいながら土器に油

を入れた灯明を置いたお盆をご神体の前でかざす献火をして、二十分ほどのプージャーが終わった。

プージャーのあと、司祭が参列者の一人一人の額に、黄色と赤の大きな祝福の印（ティラク）を付けてくれた。参列者は捧げられたギーでへつたりした岩に合掌し、恭しく額をこすりつけて、プージャーを果たしたことの喜びとシヴァ神との一体感に陶醉しているかのようであった。

ヒマラヤの聖地でのプージャーは、いつも目にしてきた雑踏と喧騒のまった中で行われる活気にあふれた町中のお寺のものとはまた一味違って、鈴の音やバラモン僧の声が澄んだ空気に共鳴して、シンプルな中にも厳かな雰囲気満ちていた。巡礼者たちから託されたそれぞれの祈りを受けとめているかのように、ケダールナート寺院は静かに佇んでいた。